

主 題：福音宣教の喜び

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章12－14節

命題：聖徒は神の主権と計画によって福音を伝えることができる。

きょうも一緒に神を礼拝できることを心から感謝します。礼拝するに当たり、皆さんに大切な質問をさせていただきます。その質問は「あなたは主イエス・キリストをあなた自身の救い主としてお信じになり、その救いを喜んでおられますか？」ということです。皆さんが主イエス・キリストを信じる信仰によって、罪からの救いが与えられ、喜びと感謝をもってきょうこの礼拝を捧げておられるなら、本当に感謝なことです。ともに救いを与えてくださった神様を礼拝し、賛美しましょう。また、私たち救われた聖徒には、神が福音を宣べ伝える機会をお与えくださいました。私たちの家族、親族、友人たちに、私たちが祈りつつ、神のみことばを語れるのは感謝なことです。神の福音によって、私たちが救いをいただき、神を礼拝する者として生きることができあかしをすることは、私たちにとって喜びです。この福音を伝える喜びは、神を信じて救われた聖徒の特権です。なぜなら、私たちが福音を語り救われた人たちが、神に対する罪を悔い改め、バプテスマを受けて教会のメンバーとなり、ともに神のみことばによって日々キリストに似た者へと変えられ続けていくことを見るのは、私たちにとって心からの喜びではないでしょうか。でも実際にいろいろな問題があることも事実です。私たちが福音を語ろうとしても、なかなか聞いてくれない場合や、状況や環境、また人間関係において聖書のことばを伝えるのが非常に難しい場合もあるからです。私たちはそんなときにいったいどうしたらいいのでしょうか――。

きょうのテキストの中で、パウロも福音宣教の喜びをピリピ教会の聖徒たちに伝えました。パウロは問題を抱えていなかったのでしょうか？本日のテキストであるピリピ人への手紙1：12－14を一緒にお読みしたいと思います。

ピリピ1：12－14

「:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってみたいと思います。:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。」

12節に「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってみたいと思います」とあります。パウロはここで、パウロの身に起こったことが神の福音を前進させることになったと、ピリピ教会の聖徒に伝えました。12節に「かえって」ということばがあるように、実はパウロの状況は、私たちが一般的に考えるならば、樂觀できるものではなく、非常に厳しいものでした。12－26節の中で、パウロが置かれている厳しい状況について三つ出てきます。一つ目は、今ご覧いただいた12－14節にパウロがキリストのゆえに投獄されて牢屋にいたことが記されています。二つ目は15－18節の中で、パウロのことを認めず、パウロの働きを認めようとしなない反対者がいたことが書かれています。そして三つ目は、パウロが裁判を待っており、裁判の結果によっては死刑となる可能性さえあるということでした。もし私たちがパウロの立場であれば、どのような気持ちになり、どのような態度をとるのでしょうか？もしかしたら気持ちが落ち込んでしまったり、イエス様の復活を証言して伝道していたのに、どうして投獄されたり、反対者がいたり、裁判を受けないといけないのですかと不平や疑い、つぶやきを考えてしまうかもしれません。しかし、きょうのテキストの中で、パウロがピリピ教会の聖徒たちに伝えようとしたことは、パウロの投獄が「かえって」福音を前進させることになったということでした。

この「前進」と訳されていることばは、ウィリアム・バークレーによると、もともと軍隊や探検家が進んでいくときに、やぶや木、いろいろな下生えを切り払って進軍の妨げとなる障害物を取り去ること

を意味することばでした。つまりこのことばは、「前進の妨げとなる邪魔ものをきれいに取り払うこと」を意味しました。パウロの投獄は福音宣教の障害となるのではなく、かえって神が福音宣教の道をひらいて、福音を伝えさせてくださる機会となったことをパウロはあかししました。パウロの願っていたことは、パウロがテモテに宛てた手紙、Ⅱテモテ2：9－10に「：9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。：10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。」と記されています。パウロが願ったことは、自分自身が安全に快適に暮らせることではなく、神の福音が神のご計画のとおりには伝えられて、救われる聖徒がおこされることでした。確かに投獄されることは、パウロ自身が望んだことではありませんでした。しかしパウロは、神が主権とその権威とご計画をもって、パウロの生涯を通して福音を伝えさせてくださることを確信し、福音宣教を喜びとしていました。きょうのメッセージを一言で言うなら、それは「聖徒である私たちは神の主権と計画によって福音を伝えることができる」ということです。救われた私たちは、神様がご計画に従って助けを与えてくださり、福音を伝えさせてくださるということを知ることができます。

本日のテキストから、まずパウロの投獄が福音の前進となった理由をご一緒に見ていきたいと考えています。そして次に、パウロの福音宣教の模範を一緒に考えてみましょう。

A. パウロの投獄が福音の前進となった理由 12－14節

ではまず、パウロの投獄が福音の前進となった理由についてご一緒に見ていきます。12－14節の中で、パウロは二つの理由を述べています。

1. カイザルの親衛隊に福音が伝えられた

一つ目は、パウロがキリストのゆえに投獄されていることがローマ皇帝であるカイザルの親衛隊とそのほかのすべての人にも明らかとなったということです。13節に、「私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり」とあります。パウロの投獄により、ローマ皇帝の親衛隊に福音が伝えられたのです。また、ピリピ4：22には、「聖徒たち全員が、そして特に、カイザルの家に属する人々が、よろしくと言っています。」と結ばれています。この「カイザルの家に属する人々」とは、ローマ皇帝の家族や親衛隊ではなく、宮殿の中の秘書とか執務官、税金を取り扱う公務員のような人々を指すことばです。パウロの投獄によって、ローマの役人たちの中に福音を聞いて、パウロを支持する、福音を支持する人たちがおこされてきたことがわかります。

いったい何が起こったのか——。投獄されると、当時の牢屋には囚人と見張りの兵士がいました。そして脱走の防止のために、捕らえられた人と兵士の手首を短い鎖でつないで、ローマの近衛兵が見張り、皇帝の前で開かれる裁判を待つことになっていました。パウロは家を借りることは許されていましたが、見張りの兵隊が昼も夜もいたのです。兵士たちはパウロの話聞きまじし、パウロを訪問する人物がどのような人物であるのか、パウロが書こうとする手紙がどんな内容であるのかをチェックするのです。当然この兵士たちは、パウロがキリスト・イエスのゆえに投獄され、イエス・キリストの復活を宣傳え、訪問する人たちと教会のいろいろな問題について話し合うのを聞いたことでしょう。兵士たちはパウロから福音を聞き、周囲の人たちに話したので、近衛兵の兵営全体がパウロのこと、福音のことを知るようになりました。すばらしいあかしだと思いませんか？パウロの投獄は犯罪を起こしたからではなく、キリストのゆえに……でした。彼が投獄された理由は、ただ、キリストの復活の証人として、十字架の死から復活したキリストに私はお会いしたというあかしや福音を信じるなら救われると伝えたからでした。私たちにとって、どうしてそれで？と思われることで、彼は投獄されたのです。しかし、「かえって」とあるように、神は、このパウロの投獄を福音の前進の働きのために用いられました。このことをパウロは喜び、感謝したのです。ですから、パウロはピリピの聖徒たちに、神がパウロの投獄を福音を前進する機会となさったと、その喜びを伝えました。

2. 多くの聖徒に確信が与えられ、福音が伝えられた

パウロの投獄が福音の前進となった二つ目の理由が14節の中に書かれています。それはパウロの投獄により、多くの聖徒に確信が与えられ、福音が伝えられたということです。14節に「また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあつて確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のこ

とばを語るようになりました。」とあります。多くの聖徒に確信が与えられたということと、その聖徒たちによって福音が伝えられたという二つです。

1) 多くの聖徒に確信が与えられた

まず一つ目、多くの聖徒に確信が与えられたということです。パウロが記しているとおりに、兄弟たちの大多数はパウロが投獄されたことを聞きました。そして彼らはパウロが投獄されてどうなるかと見てみると、パウロが福音宣教により投獄された結果、かえって神が福音を前進する機会を与えてくださったことを目の当たりにしたのです。神がパウロを守り、パウロの福音宣教を用いてローマ皇帝の親衛隊が福音を聞き、その役人たちが福音を聞いて支持するように変えられていったのです。勇気づけられると思いませんか？彼らはパウロの投獄さえも、神が福音を伝える機会としてくださることを目の当たりにして、確信が与えられました。神はあらゆる場合に主権を持っておられる、権威を持っておられるまことの神であり、私たちにはわからない出来事であっても、神のご計画を確かになさるお方なのだと。

しかも、聖書にはこの確信を与えてくださったのはどなただと書いてあるでしょう？「主にあって確信を与えられ」とあります。多くの兄弟姉妹に働かれて確信が与えられたのは“神”です。神が彼らの心を開いて、神がどのように素晴らしい神であり、投獄さえも神の福音を伝える機会となさることを確信させてくださったと言うのです。

2) 多くの聖徒により福音が伝えられた

次にパウロが語っていることは、多くの聖徒により福音が伝えられたことです。「恐れることなく、ますます大胆に」とあります。確信が与えられた多くの兄弟姉妹は、それまでも福音を伝えていました。しかし、ここに書かれていることばで、ますますとかより一層ほかの人の目や迫害を恐れることなく、彼らが大胆に福音を宣べ伝えたことがわかります。パウロがここであかししていることは、パウロの投獄が福音の前進となったことを見た聖徒たちが、自分自身の身の安全や快適さを求める生活を願ったのではなく、神の福音が伝えられることを願い、実行したということでした。多くの聖徒たちが福音宣教をしたこと、パウロにとってはそれが喜びでした。ですからパウロは、ピリピ教会の聖徒にも、この事実を伝えたいと、あいさつの次にパウロの近況報告として知らせたのです。

私たちはどうでしょうか？自分自身の状況が思うようにならないときに、神につぶやいたり、疑ったりしたことはないでしょうか？私たちにはなぜかわからない、そういうことはたくさんあります。どうしてこんなことが起こってしまうのかと思う状況もたくさんあるでしょう。でもパウロはここで私たちにあかししてくれています。それは、神はすべてをご存じの神であり、そして神の主権のもとに神のご計画をなしてくださるということです。パウロがここで語っていることを、もう一度考えてみてください。パウロは自分自身の境遇や問題について不平を語っているのではありません。パウロは自分自身のことではなく、神がパウロとパウロの状況をどのように用いてくださったかに心を留めています。パウロは神がなさっておられないこと、いただいていないことについて文句を言うのではなく、神がパウロを用いてどのように素晴らしい働きをなしてくださるのかということに目を留めました。私たちも神がすべてをご存じであることを頭で理解しています。神がすべてを治めておられる主権者であることもわかります。でも本当にそうでしょうか？私たちは神が私たちの人生を通して、神の良い作品としてくださる、神の栄光のために用いてくださることを信頼しているでしょうか？神のご計画が成ることを願って生きているでしょうか？神は私たちを救うだけでなく、今も生かして用いようとされています。だから私たちは地上で生かされているのです。私たちは、この神の主権と神のご計画に信頼して生きているでしょうか？パウロはピリピの兄弟姉妹に、パウロの投獄を通して神が栄光を現されたという近況の報告をあかししました。パウロの投獄によって兵士たちや役人が福音を聞き、福音の前進となりました。多くの兄弟姉妹が投獄を恐れず、用いてくださる神の主権とご計画に信頼して福音を宣教する機会となりました。神はこのように、私たちの思いを超えて神のみわざをなしてくださるお方です。神はどのように偉大な神です。

B. パウロの福音宣教の模範 12-14節

さて、二つ目に12-14節を通して、私たちはパウロの福音宣教の模範について考えていきたいと思えます。

1. どのように福音を伝えるのか？

一つ目はどのように福音を伝えるのかということについてです。まず、パウロの模範からどのように福音を伝えるのかが教えられます。Ⅱテモテ4：2に次のように記されています。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」と。聖書が教えてくれるのは、時が良くても悪くても、いつでもみことばを宣べ伝えるということです。反対があり、理解されず、迫害があるかもしれません。その中にあって、私たちは寛容を尽くすのです。神が御霊の実である寛容を私たちに与えてくださり、私たちは救われた者としてそのあかしを続けるのです。パウロ自身がそうでした。パウロとシラスが福音を宣べ伝えるためにピリピの町に立ち寄ったときに、彼らはむち打たれ、投獄されましたが、その中でもパウロは福音を語ることをやめませんでした。使徒16：23-25に「:23 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。:24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。:25 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」とあります。パウロとシラスは、むちで打たれ、牢屋に入れられ、足かせを掛けられた中でも、神に祈りつつ賛美の歌を歌っていたのです。パウロとシラスには、神のみこころに従って福音宣教をしているという確信と喜びがありました。だから、投獄されていても神に祈り、賛美することができたのです。この後、突然大地震が起こって獄舎の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、みな鎖が解けてしまったことが記されています。パウロはここでも、ローマの看守に対して伝道します。見張りをしていた看守が、牢の扉が開いているので囚人たちが逃げってしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとしたときに、パウロは大声で叫ぶのです。「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」（16：28）と。逃げなかったのです。当時、牢屋にいる囚人が逃げってしまった場合、その見張りをしていた看守は、その牢屋にいた囚人の刑罰を受けるという厳しい規則がありました。もしその囚人が個々人でなく、家族にも被害が及ぶような罪を犯していた場合、看守の家族にも罪が及ぶ可能性があるのです。パウロのことばに、看守があかりを取って確認し、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏したときには、この看守は、自分に救いが必要であることをわかっていました。この看守は、「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」（16：30）と言ったとあります。皆さんがご存じのとおり、聖書は次のように記しています。「ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。」と。

パウロの福音宣教によって、ピリピの町でローマの兵士が救われました。パウロはいつでも福音を語りました。それは自由な身であっても、投獄中でも、裁判を待つ状況の中でも、あした死刑になるかもしれない中でも、パウロはいつでも福音を語り続けました。パウロはまたどこでも福音を語りました。自由なとき、アレオパゴスの丘でも、自由のない牢の中で鎖につながれていても、パウロはどの町でも福音を語り続けました。また、パウロはだれにでも福音を語り続けました。自分をむち打った人に対しても、自分の見張りをしているローマの兵士たちに対しても、パウロは福音を語り続けました。いつでも、どこでも、そしてだれにでもです。

私たちはどうでしょうか？自分が福音を伝えやすい人に福音を語るのはたやすいかもしれませんが、でも、福音を伝えやすい、愛しやすい人だけに福音を語っていないでしょうか？愛する人たちだけでなく、自分が愛しにくい人たちに対しても、私たちは福音を語る備えができているでしょうか？聖書の中で、神から与えられた預言を語ることを拒み、その働きから逃げ出した預言者がいます。彼の名前はヨナです。ヨナは神からニネベの町に、罪を悔い改めるようにという神からのメッセージを伝えるようと遣わされました。しかし、ヨナはニネベではなく、別の町であるタルシシュに行こうとします。そして、船で嵐に遭い、ヨナは海に投げ込まれ、大きな魚に飲み込まれることになるのです。ヨナはニネベに行こうとしませんでした。これは歴史的な背景を考えると、当然かもしれません。なぜなら世界史の教科書を開いてみると、このニネベという町はアッシリア帝国の町の一つで、後期にはそのアッシリア帝国の首都になります。アッシリア帝国というのは、実際に北イスラエル帝国の滅亡にも大きな影響を与えた国ですから、ヨナにしてみれば、イスラエルに敵対している国やその国民に悔い改めなさいという神のメッセージを届けたいとは思わなかったのです。

また、ユダヤ人たちには神様に選ばれた民だという考えがありましたから、異邦人であるアッシリア帝国の、しかも敵対しているニネベの異邦人たちにメッセージを届けたくはなかったのです。実はヨナ

自身のことばで、ニネベの人々が神からのメッセージを聞いて罪を悔い改めること、救いをいただくことを良いことだとは考えていなかったということは明らかです。ヨナ3：10に「神は、彼ら（ニネベの人たち）が悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。」と書かれています。しかしその後、ヨナの神に対することばが続きます。「：1 ……ヨナは怒って、：2 【主】に祈って言った。「ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです。：3 【主】よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」とあります。これがヨナの態度であり、彼がメッセージを伝えたいと思わなかった理由です。

神はこのヨナに対して、トウゴマの木を与えて気づかせようとし、トウゴマの木は暑い中にあったヨナに涼しい木陰を作り、ヨナはそれを喜びました。でも神がそのトウゴマの木を取り去られ、ヨナがそのトウゴマの木陰を惜んでいると、神から次のことばがあったのです。「：10【主】は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜んでいる。：11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」と。神のみこころはニネベの人たちの悔い改めと救いでした。ヨナは神からの救いのメッセージを語ることを拒みました。自分たちの国、イスラエル民族の敵だったからです。ヨナの考えは事実でした。アッシリアはユダヤ人でもないし、イスラエルにとっては敵以外の何物でもありませんでした。しかし、聖書は神のみこころがニネベの町の人々の救いであったことを明らかにしています。

神は迫害する人々にも救いの機会をお与えになりました。皆さん、思い返してください。ステパノも聖徒の中で殉教した人物のひとりです。このステパノという人物も、何か悪いことをしたわけではなく、福音を語り、神のみことばを語り、聖霊に満たされ力強くあかしをした人物でした。しかし、ステパノは福音を語ったゆえに、石打ちにされて殺されてしまいました。しかし、そのステパノの殉教とあかし、伝道により、ひとりの人物が主イエス・キリストを信じ受け入れる機会となりました。まさにこのピリピ人への手紙を書いているパウロです。ステパノを殺すために石を投げつけていた人たちの服の番をしていたサウロ——パウロですが——、神が罪を負わせないようにという祈りをしているステパノの様子をパウロも見ていました。ステパノは、自分が愛しやすい人だけでなく、自分が愛しにくい迫害する人にも伝道し、神に取りなしの祈りを捧げました。ステパノはいつでも、どこでも、そしてだれにでも福音を伝える人物だったのです。そしてパウロがイエス・キリストに会った後に、パウロ自身が変わられました。主イエス・キリストを主とし、神とし、福音を伝える伝道者として、使徒としてパウロは用いられたのです。

さらに私たちの主イエス・キリストはどうでしょうか？主イエス・キリストは自分をむち打ち、いばらの冠を被らせ、こぶしでなぐりつけ、あざけり、つばを吐きかけ、十字架につけたローマの兵士やユダヤの群衆のために取りなし、祈られました。神の救いのメッセージを語り続け、そしてそのイエス・キリストの様子を見た犯罪人が救われました。イエス・キリストの十字架は、私たちの救いのためでもありました。私たちが救われたのは、私たちの主イエス・キリストの十字架の死と復活があるからです。私たちはどうでしょうか？どのように福音を伝えているのでしょうか？神は私たちを罪から救ってくださいました。でも罪から救ってくださるだけでなく、神の福音、メッセージを伝えるメッセンジャーとして今、私たちを遣わしておられます。そしてあなたはこの福音を伝える機会を神に願っておられますか？そう祈らずにはいられないでしょうか？

2. どうして福音を伝えるのか？

次にパウロの模範を通して、どうして福音を伝えるのかが教えられます。三つのことが出てきます。

1) 神の命令

福音を伝える理由の一つ目は、主イエス・キリストの教えを私たちが伝え、弟子とすることが神様からの命令だからです。私たちは、この命令を主イエス・キリストからいただいています。私たちは、あ

らゆる国の人々を弟子とし、バプテスマを受けるように勧め、バプテスマを受け、主イエス・キリストが命じられたすべてのことを守るように教えるという命令をいただいています。

2) 神の栄光を現す

しかし、このピリピ人への手紙 1 : 12 - 14 の前後の文脈を観察してみると、私たちがどうして福音を伝えるのかということについて、パウロはほかに二つのことを記載しています。二つ目は神の栄光を現すためです。以前に私たちが見た 9 - 11 節の中で、パウロは神の栄光が現されますようにと、このように述べています。「:9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、:10 あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、:11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現されますように。」。私たちが福音を伝え、人が罪から救われ、悔い改めて神に従う者と変えてくださるとき、神の栄光が確かに現されるからです。私たちはそのことを通して、神がどれほど偉大な神であるかを知り、ともに神をほめたたえます。神のみこころがなされるからです。

3) 愛

また 16 節に三つ目が出てきます。一つ目は神の命令でした。二つ目は神の栄光が現されるためでした。三つ目は福音を伝える動機が愛であるということです。私たちは神を愛する愛、私たちの周りにいる人たちを愛する愛のゆえに福音を伝えます。どうして福音を伝えるのか——。神を愛し、人を愛するからです。16 節に「一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています」とあります。私たちはどうして福音を伝えるのでしょうか？それは確かに神の命令であり、神の栄光を現すためですが、私たちに与えられた救いの喜び、感謝、神への愛が福音を伝えたいと願う動機であるはずで、どうして私たちは福音を伝えたいと願うのでしょうか？それは私たちが罪から救われ、神の愛と恵みのゆえに今生かされているからです。神を礼拝する者として、神の福音を伝えるメッセージを携える者として、今遣わされているからです。ですから、私たちは自分の愛する人にも、愛しにくい人にもこの神からの救いのメッセージを伝えたいと心から願うのです。福音宣教は私たち聖徒にとって神への愛、ほかの人々への愛のあかしです。

3. だれによって福音を伝えるのか？

さて、最後に私たちの福音宣教がだれによってなされるかを考えてみましょう。パウロの模範は、福音宣教がパウロ自身の力でないことを明らかにしています。パウロは、パウロ自身の投獄が神によって、かえって福音の前進のために用いられたことをあかししました。神の主権、その権威と神のご計画により、パウロの投獄さえもかえって神の福音を伝える機会となりました。私たちはいったいどなたによって、福音を伝えるのでしょうか——。ピリピ 1 : 12 - 14 の中で、神はパウロに対する迫害や投獄をも福音の前進のために用いられたことが記されていました。福音を語る時に、確かに私たちにとって困難や迫害があります。皆さんも経験されたことがあるかもしれません。私たちが福音を語ったときに、受け入れてもらえない、理解されない、むしろ反発やいろいろな苦しい目に遭ってしまった。私たちの主イエス・キリストは最後の晩餐の席で、弟子たちに次のように語られました。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」(ヨハネ 16 : 33) と。私たちがクリスチャンとして、信仰生活を生きようとするときに、私たちは周りの人々と違いが明らかになります。神のみことばに従うことと、この世の教えや考えに調子を合わせることは異なるからです。この世と調子を合わせず、自分自身を神の前に聖い生きた供え物として神にささげて生きようとする信仰生活を送ろうとするならば、この世の教えに従って生きようとする人々との間に摩擦が起こります。考え方や価値観が違うからです。主イエス・キリストご自身も人々から迫害を受け、十字架につけられました。私たちが福音をあかしし、神のみことばに従って生きようとするならば、患難があるということ聖書が教えているのです。

しかし、パウロがそうであったように、私たちは自分自身の力で信仰生活を生きたり、福音を宣べ伝えたりするものではありません。パウロは自分自身の働きが神から与えられる力によってなされていることをあかししています。I コリント 15 : 9 - 10 に次のようにあります。「:9 私は使徒の中では最も小

さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。パウロがあかしてくれすることは、神がパウロに力を与えて、神にあって働きをなしてくださったということです。確かにパウロが、伝道のために旅行をし、福音宣教しました。でも、パウロが、ひとり自分の力で働きをしたのではありませんでした。神がパウロに働きをさせてくださったとパウロがあかしますのです。神は私たちにも力を与え、福音を語り、あかしする機会をも与えてくださるお方です。エペソ2:10に「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」と記されています。聖書は、神が私たちを神の一方的な愛と恵みによって罪から救ってくださっただけでなく、神にあって、神の子どもにふさわしい良い行いをも備えてくださったと教えています。良い行いをするために、神の作品として「キリスト・イエスにあって造られた」ということばは、私たちが神によって福音を伝え、あかしする者とされたことを明らかにしてくれます。神が私たちとともにあって、私たちを強め、助けてくださることは幸いです。パウロ自身がピリピ4:11-13で次のように記しています。「:11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と。神が私たちを強くしてくださり、あらゆる境遇に対処することができるようにしてくださるということは、私たちにとって神が助けであり、力です。パウロは主イエス・キリストにあって強められ、どんなことでもできるとあかししました。

私たちは、神ご自身の力によって、神の福音を語ります。神のことばを、神の教えを伝えます。私たちが強められて神のことばを語らせていただく。だから、私たちは福音を語る、伝えることができます。問題はあなたが、今何ができるかということではなく、神に信頼して用いていただく決心が必要であるということです。 私たちにはどうすることもできないと思うことがあっても、パウロの投獄が用いられたように、神は私たちを用いてくださいます。私たちは福音を伝えるために、いつでも、どこでも、どんな場合でも、神に祈り、神の福音を語り、神に委ねることができます。

これは私自身の経験ですが、私自身もある人物に福音を語ることを難しい、困難だと考えて諦めかけたことがありました。私の親族のひとりですが、彼は自分の家に伝わる宗教を大切に考える人でした。私の母と私が、病気であるその方をお見舞いに行っても、聖書の話や神について、また人の罪やさばきがあること、主イエス・キリストの十字架と復活、つまり福音について何度話しても受け入れようとはされませんでした。かえって厳しい反論やことばがあった時もあります。その時、私自身が考えたことは、すでに繰り返し十分に福音について伝えてきたし、はっきりと彼は理解しているけれども、信じようとしないう意思を明らかにしているのだから、祈りつつ神に委ねるしかないと考えました。私も普段は医療従事者として勤務していますから、その方がもう数日で亡くなる可能性が高いことはわかっていました。しかし、私自身は仕事や家族の必要の都合の上で、もう最後になるかなという週末は訪問が困難でした。その最後の週末に母が私と祈りながら、その方を訪問し、最後にもう一度行って伝道する機会が与えられました。感謝なことに、その最後のチャンスで、その方は主イエス・キリストを救い主とお信じになり、信仰を告白されました。それまでが余りに頑なであったため、私自身は少なからず驚きましたが、神様の助けとご計画を感謝しました。そして、その数日後にその方は天に召されました。その方が天に召される少し前のことばは、苦しい中でしたが、「神様、早く、早く。天国に早く」という神様へのことばでした。私もその方が罪を悔い改めて主イエス・キリストを救い主と受け入れ、まことの神を信じたことに心から感謝しました。

神は私たちが難しいと考えていても、どんなことでもなさる神です。ですから、もしすでに家から自立して、別に家庭を持っている子どもが神に対する信仰を持っていないのだとしたら、私たちはどうしたらよいのでしょうか？もし私たちが自分の親族が、記憶も定かでなく、病の床にあるときにどうしたらいいのでしょうか？私たちは福音を伝えるために、いつでも、どこでも、どんな場合でも、その子どもや人物のために神に祈ることができます。確かに難しさはあります。話しかける方法、手紙にするの

か、語るのか。タイミングもあります。どんな時期、どんな気持ちの時に話しかけるのか？普通の信仰生活で、どのようなあかしがその子どもや人物に伝わってきたのか、知恵が必要でしょう。でも信仰を持って生きる生活のすばらしさをあかしし、愛を持ってその人との関係を大切に、福音を、神のみことばを伝えていくことは私たちの特権です。私たちはそのことについて神に祈ることができます。諦める必要はありません。なぜなら、私たちの働きは神がともになしてくださる福音宣教の働きだからです。そしてその働きを神に信頼して委ねることができます。なぜなら、私たちに人を救う力はありません。自分の子どもであっても、その子どもは神様からお預かりしている子どもで、私たちの持ち物ではありません。ですから、私たちは主の教育と訓戒によって子どもを育てるのですが、その子どもが救われるかどうかは神様の御手の中にあります。親として、信仰をあかしし、どのように神様のみことばを、主の教育と訓戒をしたのかは親が問われる責任です。でも救われるかどうかは神様の御手の中にあるわざです。決して親の失敗ではありません。私たちの願いはみこころならば、私たちの子どもや親族や友人たちの救いが与えられることです。しかし、人を救ってくださるのは神です。罪を示し、その人たちの心の中に罪を明らかにし、悔い改めて主イエス・キリストに救いを求める願いを与えてくださるのは神です。ですから、私たちは救いを決めることはできませんが、神に信頼し、その福音を伝えることを神にゆだねることができるという特権があります。

ご一緒に見てきたとおり、私たちは神がその主権とご計画をお持ちであることを知っています。ですから、私たちはこの地上に置かれている限り、神に祈り、福音を語り、神に信頼して、福音を伝えることをお任せすることができるのです。聖書が教えてくれていることは、神があなたを強め、福音を語らせてくださるということです。私たち聖徒は神の主権と計画によって福音を伝えることができます。きょうはピリピ1：12-14を通して、パウロの投獄により多くの聖徒が主にあって確信を与えられ、恐れることなくますます大胆に神のことばを語るようになったことを見てきました。だからパウロはピリピの教会の聖徒にも、まずそのすばらしい神の働きを伝えようとしていました。パウロにとっても、多くの聖徒たちにとっても救い主、主イエス・キリストはすべてだったのです。彼らはそのために生きたのです。ピリピ1：20-21にあるとおり、パウロはキリストのすばらしさが現されることを願って生きました。パウロの生涯のすべてはキリストだったのです。「:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」とあるとおりです。そしてパウロと多くの兄弟姉妹の福音宣教のゆえに、神の栄光が現されました。それはかつての多くのクリスチャンたち、聖徒を捕らえ迫害し、殉教者が大勢いた中でも、福音により人々が救われ、変えられ続けていったということです。

そしてついには、クリスチャンたちを迫害していたローマ帝国そのものが神によって変えられました。ローマ帝国の中でイエス・キリストを主と信じる聖徒がおこされ、ふやさされ、国教となりました。彼らはクリスチャンたちが殉教していく中でも、迫害している人たちのために祈る様子を見たのです。彼らはその生きざまを通して、語る福音宣教を通して信仰が与えられ、変えられていったのです。きょう見てきたとおり、福音宣教は救われた聖徒であるあなたに与えられた喜びであり、特権です。あなたは主イエス・キリストをあなた自身の救い主としてお信じになり、その救いを喜び、福音を伝えたいと願っておられるでしょうか？ぜひ考えてみてください。私たちが地上において、どのように神にお仕えできるのかということです。なぜなら、この福音を伝えるという働きは、私たちが生きている、地上に置かれている今しかできないからです。そして、私たち神様にあって救われた聖徒がその務めを、神様からゆだねられています。

最後に、メッセージをお聞きの方の中で、まだこの主イエス・キリストをご自分の罪からの救い主として信じておられない方がおられましたら、どうかきょう神様のこの救いについて考えてみてください。私たちは創造主である神様を神とせず、自分の人生だと言って、自分の必要に応じて神を作り、的外れな生き方をし、神に逆らう罪を犯し、神に言い逆らっています。それゆえに聖書は、神の怒りが天から啓示されていて、私たちには死ぬことと死後にさばきがあることが定まっていると明確に教えてくれています。しかし、私たちには希望とチャンスが与えられました。神のひとり子である主イエス・キリストが人としてこの世に来られ、十字架の上であなたの罪のすべてを背負われ、罰をすべて精算された

ということです。聖書が約束していることは、あなたの神様に対する罪の罰は、あなたが主イエス・キリストをあなたの罪からの救い主、あなたの神、主人として従っていく決心をなさるなら赦されるということです。どうか信じない者にならないで、信じる者となってください。あなたが健やかであっても、病の床にあって死を目前とされている状況の中であっても、どんなときでも、どんな状況の中であっても、神はあなたに救いを与えてくださる偉大なお方です。そしてもし聖書の救いについて質問があるようでしたら、この教会に連絡を下さい。また、この教会のクリスチャンの方々に話を聞いてみてください。聖書の教える救い、福音についてよく考え、そしてイエス・キリストが十字架で死なれただけでなく、死から敢然と復活されたことを私たちが喜び、ともに神を真に礼拝する者となることを心から願っています。

私たち救われた聖徒には、神が福音を宣べ伝える機会をお与えくださいました。私たちの家族、親族に、また友人たちに私たちが祈りつつ神のみことばを語り、そして神様に信頼してお任せできるのは本当に感謝なことです。あなたはこの神様にあって、今週も、そしてこれからもどのように生きていく決心をなさいますか？